

都道府県・ 指定都市番号	59	都道府県・ 指定都市名	京都市	研究課題番号・校種名	2 (4) 小学校
				領域名	E S D
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (4) E S Dを学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成, 指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (児童・生徒数)	きょうとしりつすぎくだいよんしょうがっこう 京都市立朱雀第四小学校 (302人)				
所在地 (電話番号)	〒604-8482 京都府京都市中京区西ノ京笠殿町 164 (075-841-3204)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=103305				
研究のキーワード	<input type="checkbox"/> 未来に向けて持続可能な社会づくりを担う子の育成 <input type="checkbox"/> マトリクス (単元構想図) <input type="checkbox"/> あかしやモデル <input type="checkbox"/> ルーブリック評価 <input type="checkbox"/> あかしや (エネルギー) 環境プログラム・E S Dカレンダー				
研究結果のポイント	<input type="checkbox"/> 実践につながる「マトリクス (単元構想図)」 <input type="checkbox"/> 協働的な学びの成果が見える「あかしやモデル」 <input type="checkbox"/> 新たな自分を目指す励みとなる自己評価できる「ルーブリック」 <input type="checkbox"/> あかしや (エネルギー) 環境プログラム・E S Dカレンダーを活用しての授業展開の構築～				

1 研究主題等

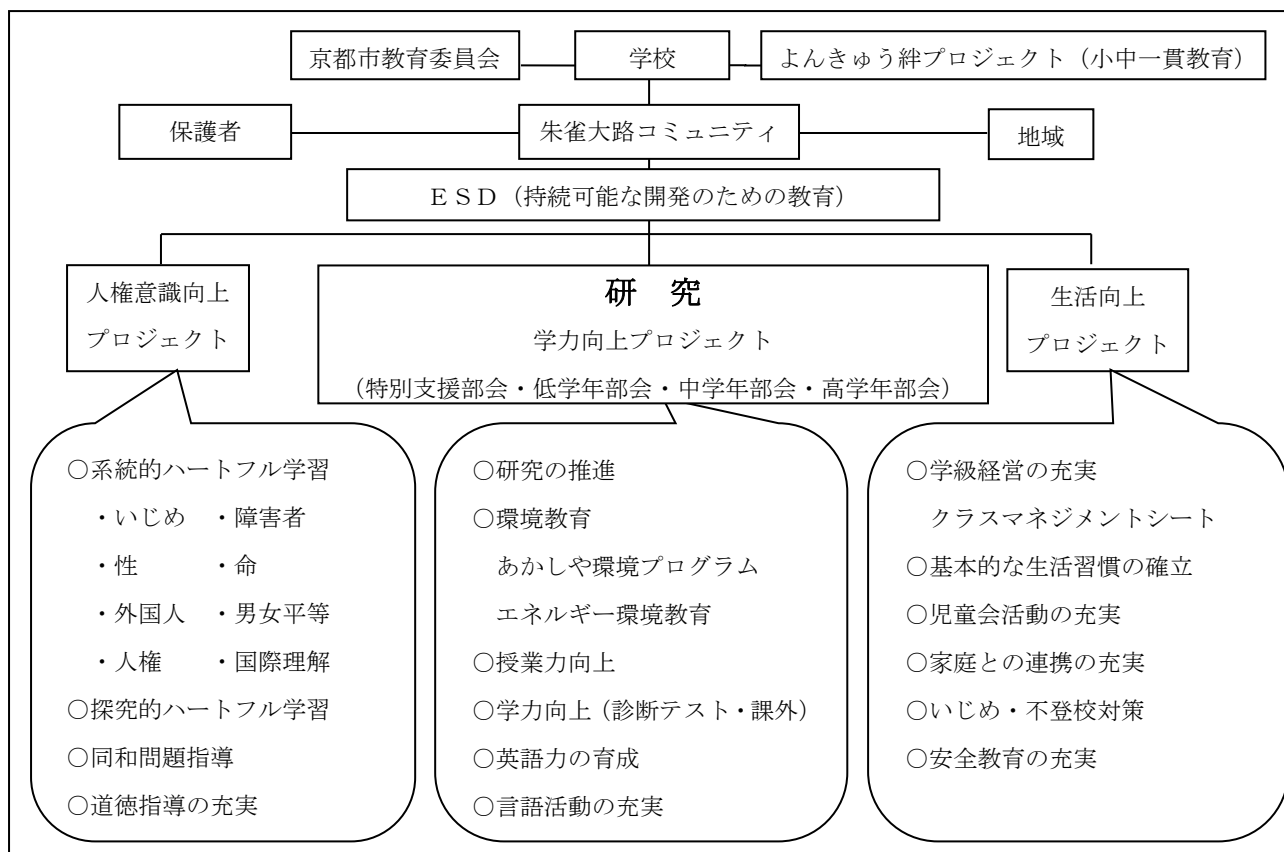
(1) 研究主題

**協働的問題解決を通して、おもいを大切にしながら、
あらゆる角度から、総合的に深く考える力を育む**

(2) 研究主題設定の理由

本校は 20 年来、環境教育に取り組んでいる。その間、社会は急速に変化し、環境に関する問題は年々グローバルなものになっている。さらに、3. 11 東日本大震災以来、予期せぬことに対して、対応できる力が見直されている。今後予想のできない不測の事態に対してお互いが協働的に問題を解決できる力をつけていかなければならない。また、相手の考えを尊重し、自分の思いだけでなく相手を意識した話合いを行い、物事を多面的・総合的、批判的に考える力が必要である。本校の子供の実態を見てみると、素直で、学校のきまりや約束を守り、落ち着いて学校生活を過ごしているが、しっかりと自分の考えが言えなかったり、物事に対して受け身の姿が見られたりする。未来を生き抜く力を育てるため、協働的に問題を解決する授業を通して、多面的・総合的、批判的な思考ができる子供を育てたい。また、学んだことを社会で実践する教育活動を進めることで、自ら課題を発見し、自らの問題として捉え、解決に向けて実践する力をつけたいと考え、この主題を設定した。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成28年度	4月	第1回理論研修会 エコ改修校舎活用研修
	5月	あかしや (エネルギー) 環境プログラム・E S Dカレンダーの作成・修正
	6～10月	校内授業研究会 (全7回) 第2回理論研修会 <第1回学校評価> (9月)
	11月	<あかしやフェスティバル>地域への発信
	12月	研究発表会 (公開授業/講演会)
平成29年度	2月	<エコフォーラム>地域や全市への発信
	3月	年間反省 <第2回学校評価> 第3回理論研修会
	4月	第1回理論研修会 エコ改修校舎活用研修
	5月	あかしや (エネルギー) 環境プログラム・E S Dカレンダーの作成・修正
	6～10月	校内授業研究会 (全7回) 第2回理論研修会 <第1回学校評価> (9月)
平成29年度	11月	<あかしやフェスティバル>地域への発信
	12月	研究発表会 (公開授業/分科会/講演会) <エコフォーラム>地域や全市への発信
	1月	<ハートフル集会>ハートフル学習の交流
	2月	年間反省 <第2回学校評価>
	3月	<ハートフルフォーラム>ハートフル学習の発信 第3回理論研修会

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

「協働的に問題を解決するために批判的、多面的・総合的に考える子供」「人権の尊さを理解し、自他を大切にすること」「学んだことを、主体的に実生活で生かすことができる子供」を研究の中で目指す子供の姿とする。そして、

- ・子供の思考の流れを明確にした単元構想をつくり，その中で学習したことを実践できる場を設けたり，参加体験型の学習を大切にしたりすることで，主体的な学びや，実生活に生かす態度につながるのではないだろうか。
- ・自分の考えを説明したり，お互いの考えを比べたり，整理し理由に対して批判的に考えたり，思考への改善点や他者へのアドバイスを考えたりすることができるモデルを，子供自ら活用することが，批判的，多面的・総合的に考える力の育成につながるのではないだろうか。
- ・学んだことで自分に何が身に付き，何が課題なのかがわかり（自己認識），新たな自分を目指す励み（新たな飛躍）になるような自己評価をすることが，未来に向けて持続可能な社会づくりを担おうとする態度の育成につながるのではないだろうか。

の3つを仮説とし，研究を進める。

(2) 具体的な研究活動

(i) 実践につながる「マトリクス（単元構想図）」の作成

子供が，自ら課題を発見し，その解決に向けて主体的・協働的に探究し，学びの成果等を表現し，更に実践に生かしていけるようにするために，単元ごとに「マトリクス（構想図）」を作成する。「問題解決」の過程を横軸，その内容を縦軸にとり，横軸は「理解→協議（実行）→モニタリング」，縦軸は「話し合い→行動→実生活」として，横3×縦3の9つの要素を満たすように単元を構想し，さらに協議し実際に行動したことがどうであったかを振り返り，それを修正するために，改めて話し合うといったスパイラルの形になるようにする。

協働 ↑		役割の理解	実践	フィードバック
	行動	行動するにはどのような形がいいのか	行動 (プランの実行)	振り返り ↓ 修正
	話し合い	話を聞く (相手理解)	協議 (行動目標)	振り返り ↓ 修正
	学習課題	理解	協議 (実行)	モニタリング
				→

(ii) 系統的・探究的ハートフル学習の実施 問題解決

子供の人権意識向上を目指し，年間10回実施している「系統的ハートフル学習」において，子供同士の「つながり」を取り入れた参加体験型の学習を展開したり，多様な立場の人々との「つながり」が体験できる場を用意したりするなどの工夫を行う。また，今年度より，20時間を1単元として各学年に応じた重点課題について学ぶ「探究的ハートフル学習」を創設する。系統的ハートフル学習と探究的ハートフル学習の両輪で人権教育を進めることで，より確かな子供の人権意識の向上を図る。

(iii) 思考の変容がわかり，思考の深まりが見える「あかしやモデル」の活用

低学年は比較的，中学年では多面的・総合的に，高学年では批判的に考える学習を組み込み，その学習の中で，思考の変容がわかり，学びの成果が見えるなど，思考の深まりを「可視化」する支援となるモデルを作成・活用する。学習のねらいや児童の発達段階に応じて，ノートやワークシート，教具・板書にも積極的に取り入れる。

(iv) 新たな自分を目指す励みとなる自己評価できるルーブリック評価の作成

自分に何が身に付き、何が課題なのかがわかり（自己認識）、新たな自分を目指す励み（新たな飛躍）になるような自己評価ができるルーブリックを作成する。3つの目指す子供の姿から、観点は「学力」「人権意識」「生活応用力」の3段階で構成する。

(v) 地域との連携・協働

学校と地域が連携・協働して「人と環境にやさしい町 朱四学区」を目指す取組を進める中で、学校大好き、地域大好きな子供、地域の中で誇りをもって未来を生き抜く力をもつ子供を育てる。

(vi) あかしや（エネルギー）環境プログラム・ESDカレンダーの再構築

あかしや（エネルギー）環境プログラムでは、環境（エネルギー環境）学習の進め方や実施のポイント、評価のポイント等、指導の工夫・改善をする。また、ESDカレンダーでは、ESDの視点で人権教育と環境教育を見直し、地域・社会とのつながりや教科との関連を考えて教育課程を再構築する。

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

○思考の変容がわかり、協働的な学びの成果（思考の深まり）が見える「あかしやモデル」の活用

ここ数年、あかしやモデルの作成・活用を続けてきたことで、子供自ら活用しようとする姿が見られるようになった。低・中学年は、あかしやモデルを基に、お互いの考えを比べたり、整理したりしながら考えることができた。高学年は、考えを説明し合うだけでなく、あかしやモデルからよりよい思考への改善点や他者へのアドバイスを考えることができた。

○あかしや（エネルギー）環境プログラム・ESDカレンダーを活用しての授業展開の構築

各学年の環境教育の時期やねらい・進め方やポイントなどが書かれている「あかしや環境プログラム」を作成したことで、全ての教員が同じレベルの環境教育を進めることができた。また、年間の授業展開を全て構築した「ESDカレンダー」を作成・活用したことで、指導内容の共通理解を図ることができ、ハートフル学習や環境学習と、教科との関連を明確にして、横断的に同一のテーマで授業を展開することができた。さらに、社会（地域・専門家の方々）とのつながりを密にした学習を展開することもできた。

●新たな自分を目指す励みとなる自己評価できるルーブリック評価の作成

今年度、より客観的で一貫性のあるルーブリックを作成し、子供たちが自己評価をできることを目指した。ブレのない「ものさし」を作ることはできたが、子供が自らの学びを振り返りながら、意欲的に努力しようとする姿につながったとは言い難かった。今後は、自分がどの段階にいるということを知ることができ、次の新たな自分を目指すことにつながるように、子どもと共有できるルーブリック評価を探っていきたい。

4 今後の取組

ESDの視点で見直した環境教育と人権教育がさらに社会に開かれた教育課程になるようにカリキュラム・マネジメントの視点で学校教育全体や各教科等における指導との効果的なつながりを探り、あかしや(エネルギー)環境プログラムやESDカレンダーを改善・進化させていきたい。また、育成を目指す資質・能力を明確にして、PDCAサイクルの「C」のところより客観的で一貫性のあるルーブリックを作成し、今年度取り組んだ自己の思考の変容も見える「あかしやモデル」の評価への活用やポートフォリオ評価やパフォーマンス評価等の活用など、子供たちが自分に何が身に付き、何が課題なのかがわかり、（自己認識）新たな自分を目指す励みになるような（新たな飛躍）評価の研究を継続・発展させていきたい。